

風流

第十四号



駐日大使の講演シリーズを 秋田で実現

—— 大使館との交流で多様な異文化を体験しよう

国際教養大学教授 勝又 美智雄



秋田市にある国際教養大学では二〇〇九年九月から二年間、世界の主要国の駐日大使を招いて連続講演を行っている。開学五周年を迎えた大学と創刊百三十五周年を迎えた地元の秋田魁新報社との記念事業として企画・共催したもので、「国際社会の未来と日本の役割」を共通テーマに、十人の大使に自由に語ってもらい、本学の学生や一般市民に「世界を見る目」を養う一方、大使や大使館員に日本の若者やごく普通の市民に親しく接してもらおうと、「草の根」レベルでのお互いの理解を深めてもらうという趣旨で始めた。

駐日大使はその国を代表して日本に来て

おり、公務や公式行事への出席が多く、特定の大学や団体のために講演に出かけるという例は少なく、依頼してもなかなか実現しにくいというのが実情だ。現に東京の有名私立大学が以前、各国大使の連続講演を企画したが、せいぜい一年に一人の大使に来てもらうのがやっとだったという。それだけに、東北の田舎に、はたして一年間に何人呼べるか、と懸念する声もあった。早くから講演日程を決めていても、日本とその国との関係の急な変化やその国の国内事情、大使館の都合などで、大使の講演が直前にキャンセルされることも決して珍しくないからだ。

ところが本学の大使講演シリーズは、第一回のデビッド・ウォレン英国大使を皮切りにフィリップ・フォール（フランス）、ミハイル・ペーリイ（ロシア）、レンツェンドー・ジグリット（モンゴル）、権哲賢（クオン・チョルヒョン）韓国）、ワリード・マハムド・アブデルナセル（エジプト）、ジョナサン・フリード（カナダ）、マレー・マクレーン（オーストラリア）各大使と既に八人が登場してくれ、さらに六月末にヘーマント・クリシャン・シン（インド）、七月にはフォルカー・シュタンツェル（ドイツ）各大使が来てくれることが決まっている。当初予定通り十人の大使講演が実現するという、ちょっとした快挙となった。

羽田空港から一時間で、秋田空港から車で十分、という「地の利」も幸いして、東京の大使館から日帰りでも来てくれる大使もいれば、「折角の機会だから」と泊りがけで男鹿半島や田沢湖、十和田湖、角館、象潟、鳥海山など秋田県内の観光名所まで足を運んでくれる大使もいる。講演の前後に大学内のカフェで簡単なレセプションを開いて学生や教職員たちと歓談する機会もつくっているが、大使たち、随行了した大使館員たちも一様に「日本の大学生たちに直接話できてうれしい」「学生や一般市民の率直な話が聞けて面白かった」と喜んでくれている。

本学は既に世界三十四カ国の百五大学と教育交流協定を結んでおり、お互いに留学

生を交換している。それが大使たちの関心を呼び、本学および秋田を訪問するきっかけになっていることは間違いない。そして私たちにとっても特につれいのは、来学した大使、随行員たちが例外なく秋田を好きになって、ぜひまた訪問したいと言ってくることだ。そうした市民レベルでの交流を深めることが、確実にお互いの国のファンを増やし、日本の学生や市民の「多文化理解・多文化共生」感覚を養うことに大いに役立つはずだ。

聞けば、国際芸術家センターでは、各国大使館と首都圏の小・中・高校や市民団体などとの交流を促すために、舞台芸術の公演や大使館員とその家族たちによる料理教室などさまざまな企画を進めているという。最近では日本の若者が「内向き」になって海外の出来事に関心を持たなくなっているという。それは多分に、テレビや映画などの映像で海外のことを知ったつもりになっているからではないだろうか。だが、生身の人間はもっと多様で、もっと多彩で、個性豊かな魅力に満ちている、ということを日本の若者にもっと知ってもらいたいと思う。また同時に、各国大使、大使館員にもごく普通の日本人、それも特に小学生から高校生と気軽に接して、お互いの「お国自慢」をしながら、日本の子供たちの間にその国のファンを増やしてもらいたい、と私は期待している。

